

『往生要集』別相観四十二相と仏像の和様化

松 出 洋 子

〔抄 録〕

阿弥陀仏の理想的な相好を説く『往生要集』別相観四十二相の所依経典は『大般若経』と『観仏経』である。このことは著者源信自身が明示するが、実際は経典名を示さず引用するため、その引用状況はわかりづらい。先行研究では主に『大般若経』の引用について改めて確認を行った。その結果、簡潔な文を特徴とする『大般若経』からは阿弥陀仏の体足部の相が多く引用されるのに対し、詳細な説明を特徴とする『観仏経』からは頭部についての相が多く引用される傾向があることが判明した。

はじめに

本稿の目的は、『往生要集』大文第四正修念仏第四観察門別相観に説かれる阿弥陀仏の四十二相（以下、四十二相）が、所依経典『大般若波羅蜜多経』（以下、『大般若経』）、『観仏三昧海経』（以下、『観仏

また四十二相では、阿弥陀仏の頭・体・足部を通じて「円満」という共通する表現によりその形状を説明するが、この時期に飛躍的に和様化が進展する仏像の作風の特徴もまた、穏やかで丸味を帯びた「円満」な表現である。そこで、四十二相の「円満」表現が仏像の和様化を推し進める一因となった可能性についても考察を加えた。

キーワード 『往生要集』、別相観四十二相、源信、仏像の和様化、康尚

経』）からどのように引用されているか、実際の引用状況を明らかにすること、及び四十二相の説く阿弥陀仏の「円満」表現と仏像の和様化との関係性を探ることにある。

『往生要集』における四十二相とは、仏の三十二相に源信が独自に十相を加え阿弥陀仏の理想的な相好を説いたもので、別相観固有のもの

のである。源信は四十二相の所依經典について、四十二相列記の後に続く次の文で「是諸相好行相利益廢立等事、諸文不同、然今三十二略相、多依大般若、広相随好、及諸利益、依観仏経¹」（このもろもろの相好の行相・利益・廢立等の事、諸文不同なり。しかれども、今三十二の略相は多く大般若に依り、広相と随好と及びもろもろの利益とは観仏経に依る²）として、『大般若経』と『観仏経』の二経を示している。しかしながら、この文は『大般若経』と『観仏経』の二経を引用したという、いわば方針を示したのみで、四十二相各相におけるそれぞれの經典の具体的な引用については語られていない。また四十二相各相においても、二経の經典名は示されず文の引用のみが行われており、いったい各相のどの部分にどちらの經典が引用されたのか、一見するだけでは判然としない。

福原隆善氏はこれら二経のうち『大般若経』からの引用を主軸に、四十二相各相における引用状況を検証した。その結果、『大般若経』の具体的な引用状況が明らかになった。その一方で、『観仏経』の引用状況についての詳細な検討は行われていない。

そこで、本稿前半では、福原氏が明らかにした『大般若経』の引用状況について確認を行ったのち、『観仏経』の引用について改めて詳細に検討を行い、二経の引用についての新たな分類を試みたい。

続いて、本稿後半では、四十二相の内容と仏像の和様化との関係性について考察する。そのためにまず、四十二相の内容を掘り下げる。その具体的な内容は、四十二相において『観仏経』が阿弥陀仏の頭部に関する相に多く引用されていること、また四十二相全体を通じて

「円満」という表現が用いられていることで、これらを実例をあげて確認する。そのうえで、四十二相が仏像の和様化に及ぼした影響について考察する。

この時期、すなわち『往生要集』が著された寛和元年（九八五）頃の仏像の作風は、それまで続いた停滞の時期（「和様への模索」³、「典型の模索」⁴、「規範の喪失」⁵などと表現される時期）を抜け出し、「和様に向かう趨勢のなか、仏師康尚がそれを飛躍的に高めひとつの到達点を示した」⁶時期であるとされる。仏師康尚がこの時期に「大きな飛躍」⁷をみせた契機については定説を見ないが⁸、本稿では一つの可能性として四十二相の影響を考えたい。

そもそも『往生要集』は、当時の比叡山の世俗化への危機感を背景として、源信が「念仏実践の指南書」⁹として著したものである。そのため『往生要集』が世に出ると、「浄土教家・念仏者の間に空前の反響」¹⁰をよんだといわれる。別相観の四十二相は、観想念仏を行う際の阿弥陀仏の理想的な相好を具体的に示すものであったため、造像の際にもその内容が影響を及ぼした可能性は充分に考えられる。

また、当時の有力仏師である康尚の造像は、源信周辺から始まり、天皇家や藤原撰関家関連など権力の中枢へと広がっていく。そのため、康尚やその工房で制作された仏像の作風は、発注主の権力を背景に新たな規範力を持ち、「和様化」といわれる作風として定着したと考えられる。実際に、この時期の仏像に対しては、「穏やかな表情の丸顔」¹¹「穏やかな抑揚ある身体構成と柔らかな肉取り」¹²「量感の喪失や満月の如しと形容される面貌表現」¹³、「満月のような顔」¹⁴など、面貌

の穏やかさや体部の円満さが指摘される。

そこで、本稿後半では、四十二相と仏像の和様化との関係性を、康尚の事蹟を踏まえながら考察する。

一、福原隆善氏による『大般若経』引用を主軸とした分類

前述のように福原隆善氏¹⁵⁾は、『大般若経』と『観仏経』から四十二相への引用について、『大般若経』からの引用を主軸に次のように分類した。すなわち、『大般若経』の説く仏の三十二相からは二十八の相、『大般若経』の八十随形好からは四つの相が四十二相に引用されたという。¹⁶⁾ これらを併せて、三十二の相が『大般若経』に由来することになり、残りの十相は『大般若経』を引用しない相ということになる。そこでこの十相について『観仏経』との照合を行ったところ、『観仏経』からの引用が確認されたという。¹⁷⁾ これをまとめると、四十二相のうち二十八の相が『大般若経』三十二相から引用され、四つの相が『大般若経』八十随形好から引用される。そして、残りの十相が『観仏経』から引用されるというのが福原氏の分類である。ここで注意を要するのは、『大般若経』三十二相と八十随形好から引用された三十二の相については、『観仏経』の引用の有無が十分に検討されていないことである。この点に留意しながら、福原氏による分類の内訳をみてみよう。

まず『大般若経』三十二相から、四十二相に引用された二十八の相¹⁸⁾について、少し煩雑ではあるがここで列挙する（各相の内容は表一参

照。なお、以下の丸括弧内の数字は四十二相の第何相であるかを示す）。

それは、(1)頂上肉髻¹⁹⁾、(2)頂上髮毛、(6)面輪円満、(7)眉間白毫、(8)如来眼睫、(9)仏眼青白、(12)四十齒齊、(13)四牙鮮白、(14)舌相広長、(20)肩項円満、(21)腋下充実、(22)仏双臂肘、(23)諸指円満、(24)指間輓網、(25)其手柔軟、(26)領臆広大、(29)身皮金色、(30)身光任運、(31)身相脩広、(32)体相縦広、(33)容儀端直、(34)如来陰藏、(35)兩足充滿、(36)双臚纖円、(37)足跟円満、(38)足趺脩高、(40)足下千輻輪、(41)足下平満相の二十八相である。

また『大般若経』八十随形好から引用された四つの相は、(4)耳厚広長、(5)額広平正、(10)鼻脩高直、(11)脣色赤好である。

最後に『観仏経』から引用された十の相は、(3)髮際五千光、(15)舌下宝珠、(16)咽喉瑠璃、(17)頸出円光、(18)頸出二光、(19)欠筯骨満相、(27)胸有万字、(28)心相妙光、(39)身八万四千毛、(42)足下生一華である。

四十二相の引用に関する福原氏の研究は以上であるが、先に述べたように、『大般若経』からの引用が確認された三十二の相について、『観仏経』からの引用の有無は不明である。

そもそも『観仏経』では三十二相・八十随形好が区別なく説かれており、源信はそれに倣って四十二相を相好の区別なく説いている。このことについて源信は、「相好間雜、以為観法、亦是観仏経之例也」（相と好とを間雜して、以て観法となすことは、またこれ観仏経の例なり）と注記しており、これを受けて福原氏も、「『観仏三昧海経』の影響も相当強いようであるが（中略）不明確²⁰⁾」であるとして、『観仏経』の影響を指摘しつつも、その詳細については十分な検討をしてい

表一 四十二相と引用元である『大般若経』、『觀仏経』の引用関係

(1)頂上肉髻 項目名	四十二相（本文、割注）	大般若経（大正藏卷6）		引用元
		三十二相	六十随形好	
(1)頂上肉髻	一、頂上肉髻、無能見者、高顯周円、猶如天蓋、或業広觀者、次志觀、彼頂上有大光明、具足千色、一一色作八万四千支、一一支中有八万四千化仏、化仏頂上亦放此光、此光相次、乃至上方無量世界、於上方界有化菩薩、如雲而下、因遮諸仏 《大集經云、恭敬父母師僧相上、得肉髻相、云云、若於此相生隨喜者、除却千億劫極重惡業、不墮三塗》	世尊頂上烏瑟膩沙高顯周円、猶如天蓋。是第三十二。968a06-a07	千色。色作八万四千支。一一支中、八万四千諸妙化仏。……化仏頂上亦放此光。光相相次乃至上方無量世界。於上方界有化菩薩。如雲微塵從空而下因遮諸仏。663a02-a06 相生隨喜者。除却千億劫極重惡業。後世生處。不落三塗。697a05-a06	
(2)頂上髮毛	二、頂上八万四千髮毛、皆上向靡、右旋而生、永無離落、亦不雜亂、紺青稠密、香潔細軟、或業広觀者、志觀、一一毛孔、旋生五光、若甲之時、箭長離量（如釈尊、髮長、從尼拘樓陀精舍至父王宮、遷城七回）無量光普照、作紺瑠璃色、色中化仏、不可稱數、現此相已、遷住仏頂、右旋宛轉、即成壽文 《大集云、不以惡事如衆生故、得髮毛金剛相》	世尊髮毛皆上靡。右旋宛轉柔潤紺青。嚴金色身甚可愛樂。是第十二。967c09-c11	頂上有八万四千毛。皆上向靡右旋而生。分青分明四指分明、一一毛孔旋生五光649a18-a20 髮。從尼拘樓陀精舍。至父王宮。如紺瑠璃。遷城七回。649b01-b02	
(3)髮際五千光	三、於其髮際、有五千光、間錯分明、皆上向靡、因遮諸髮、遷頂五匝、如天画師所作画法、因円正等、細如一糸、於其末圓、生諸化仏、有化菩薩、以為眷屬、一切色像、亦於中見 《業広觀者、可用此觀》		次觀髮際……有五千光間錯分明、皆上向靡因遮諸髮。從頂上出遷頂五匝如天画師所作画法。因円正等細如一糸。於其末圓生諸化仏。有化菩薩以為眷屬。649b11-b15	
(4)耳厚広長	四、耳厚広長、輪埵成就、或志広觀、旋生七毛、流出五光、其光千色、色千化仏、仏放千光、遍照十方無量世界 《此隨好之業因、可觀、觀仏三條結云、觀此好者、滅八十劫生死之罪、後世常与陀羅尼人為眷屬、云云、下去諸利益、皆亦依觀仏三條經而注》	世尊耳厚広大脩長輪埵成就。是四十二。968b23	耳出五光其光千色。色千化仏。仏放千光……遍照十方無量世界。664a19-a21 除滅八十劫生死之罪。656a24-b25 陀羅尼人以為眷屬。656a29-c01 云何觀如来額広平正相。663b13	
(5)額広平正	五、額広平正、形相殊妙（此好業因并利益、可觀）		世尊額広平正形相殊妙。是四十五。968b26	
(6)面輪円満	六、面輪円満、光沢照怡、端正皎潔、猶如秋月、双眉皎淨、似天帝弓、其色無比、紺瑠璃光（見如来者、生歡喜故、面輪円満、觀此相者、除却億劫生死之罪、後身生處面見諸仏）	世尊面輪其猶滿月。眉相皎淨如天帝弓。是第三十。968a03-a04	世尊面輪脩広得所皎潔光淨如秋滿月。是五十七。968c08-c09 世尊面貌光沢照怡是五十九。968c10	
(7)眉間白毫	七、眉間白毫、右旋宛転、柔軟如瑠璃網、鮮白遼河雪、或次志広觀、舒之直長六、如白瑠璃前、放已右旋、如瑠璃珠（丈六仏白毫、長丈五、右旋發一寸、周円三寸）於十方而、現無量光、如万億日、不可具見、但於光中、現諸蓮華、上過無量塵数世界、花花相次、因円正等、一一花上、一化仏坐、相好莊嚴、眷屬圓遊、一一化仏、復出無量光、一一光中、亦無量化仏、是諸世尊、行者無數、住者無數、坐者無數、臥者無數、或說大慈大悲、或說三十七品、或六波羅蜜說、或諸不共法說、若広説者、一切衆生、至十地菩薩、亦不能知之 《大集經云、不隱他德、称揚其德、得此相、觀仏結云、從無量劫、晝夜精進、身心無懈、如教頭燃、勤修六度、三十七品、十力無畏、大慈大悲、諸妙功德、得此白毫、觀此相者、除却九十六億那由他恒河沙微塵劫生死之罪》	世尊眉間有白毫相。右旋柔軟如瑠璃網。鮮白光淨遼河雪等。是三十一。968a04-a06	眉間白毫相右旋宛転。661c17 復如是。出無量……光。一一光中。復有無量百億化仏。654c03-c04 是諸世尊。行者無數住者無數坐者無數臥者無數……說大慈悲。說三十七品助菩提……說六波羅蜜。說……不共。682b10-b14 若広説者、一切衆生至十地菩薩、亦不能知。654a17-a18 仏白毫相從無量劫655a10 身心不懈……如教頭燃……晝夜精進655a18-a20 三十七……十力四無所畏大慈大悲三念処諸妙功德。得此白毫。655a26-a27 除却九十六億那由他恒河沙微塵劫生死之罪。655a04-b05	
(8)如來眼睫	八、如來眼睫、猶如牛王、紺青蓋、不相雜亂、或次志広觀、上下各生、有五百毛、如優曇花鬘、柔軟可愛樂、一一毛端、流出一光、如願裂色、遷頭一匝、純生微妙諸菩薩蓮華、一一花台、有梵天王、執青色蓋 《大集經云、至心求於無上菩提故、得生王睫相、大經云、見於怨憎、生於善心故》	世尊眼睫猶若牛王。紺青齊整不相雜亂。是二十八。968a01-a02	如來眼睫。上下各生有五百毛。柔軟可愛如優曇華鬘。於其毛端流出一光。如願裂色……遷頭一匝……純生微妙諸菩薩……青色蓋。有梵天王手執是蓋。656a05-a10	
(9)仏眼青白	九、仏眼青白、上下俱明、白者過白至、青者勝青蓮華、或次志広觀、眼出光明、分為四支、遍照十方無量世界、於青光中、有青色化仏、於白光中、有白色化仏、此青光中、復現諸神通（大集經云、修集慈心、愛視衆生、得紺色目相、云云、於少時間、觀此相者、未來生處、眼常明淨、眼根無病、除却七劫生死之罪）	世尊眼紺青鮮白。紺瑠璃面輪皎潔分明。是二十九。968a02-a03	仏眼青白。白者過於白至……青者勝青蓮華。656a10-a11 仏眼……出大光明……遍照十方無量世界。663c07-c08 於青光中有青色化仏。於白光中白色化仏。此青白色……神通。663c13-c15 於少時間及觀象眼。未來世中經五生處。眼常明淨眼根無病。除却七劫生死之罪。656a22-a24	

(00)鼻脩高直	十、鼻脩高直、其孔不現。如獅金翅、如鸚鵡頰、表裏清淨、無諸鬚鬣、出二光明、遍照十方、變作種種無量好事。《觀此種種好者、滅千劫罪、未來生處、聞上妙香、常以戒香、為身標路》		世尊鼻高脩而且直其孔不現。是三十三。968b14-b15	觀音。除滅千劫極重惡業。未來生處。聞上妙香……常以戒香為身標路。657a01-a03
(01)唇色赤好	十一、唇色赤好、如瓔婆菓。上下相稱、如量嚴麗、或灰心灰觀、回円光明、從仏口出。猶如百千赤真珠寶、入出於鼻白毫髮間。如是展轉、入円光中。《此唇隨好業等、可勸》		世尊唇色……如瓔婆菓上下相稱。是二十八。968b09-b10	云何觀如來唇色赤好如瓔婆菓相。於上下唇及舌兩側。和合出光。其光回円。猶如百千赤真珠寶。657a14-a16
(02)四十齒齊	十二、四十齒齊、淨密根梁、白逾河雪、常有光明、其光紅白、映耀人目。《大經云、遠離阿舌惡口惡心、得四十齒齊白齊密相、云云》	世尊齒相四十齒齊。淨密根梁白逾河雪。是二十四。967c21-c22		口四十齒印上生光……其光紅白……映耀人目。657a18-a22
(03)四牙鮮白	十三、四牙鮮白、光潔鋒利、如月初出。《大集經云、身口意淨故、得二牙白相、云云。觀此唇口齒相者、滅二十劫罪》	世尊四牙鮮白鋒利。是二十四。967c22		
(04)舌相成長	十四、世尊舌相、薄淨平長、能覆面輪、至耳髮際乃至梵天、其色如赤銅、或次可灰觀、舌上五画、猶如印文、映時動舌、出五色光、遍仏七画、遠從頂入、所有神變、無量無邊。《大集經云、護口四過、得成長舌相、云云。觀此相者、除百億八万四千劫罪、他世值八十億仏》	世尊舌相薄淨平長。能覆面輪至耳髮際。是二十六。967c26-c28		舌上五画如印文……舌出五光……遍仏七画遠從頂入。657b03-b06 是觀者。除去百億八万四千劫生死之罪。捨身他世。值遇八十億仏。659a23-a24 其舌根下及舌兩邊、有二寶珠、流注甘露滴舌根上。請天世人。十地菩薩。無此舌相亦無此味。657b01-b03
(05)舌下宝珠	十五、舌下兩邊、有二寶珠、流注甘露、滴舌根上、諸天人、十地菩薩、無此舌根、亦無此味。《大般若有異說、可勸、大經云、飲食施身故、得上味相》			咽喉如琉璃筒。狀如累蓮華相者。648a21-a22
(06)咽喉留响	十六、如來咽喉、如琉璃筒、狀如累蓮華、所出音聲、調韻和雅、無不尋聞、其音洪震、猶如天鼓、所發言總均、如伽陵頻伽音。任運能遍大千世界、若作意時、無量無邊、然為利眾生、隨類不增減。《大經云、不誑彼短、不謗正法、得梵音清相。大集云、於諸眾生、常柔濡語故、云云》			咽喉上有点相。分明……一点中流出二光。其……光遍前円光。足滿七画梁画分明。一一画間有妙蓮華。其蓮華上有七化仏。一一化仏有七菩薩以為侍者。一一菩薩……執如意寶珠、其珠金光青黃赤白及摩尼色青赤具足……困躄諸光画……仏顯。659b09-b15
(07)頸出円光	十七、頸出円光、咽喉上、有点相分明、一点中、出一光、其一光、遍前円光、滿足七画、梁画分明、一一画間、有妙蓮華、華上有七仏、一一化仏、各有七菩薩、以為侍者、一一菩薩、執如意珠、其珠金光、青黃赤白、及摩尼色、皆悉具足、困躄諸光、上下左右、各各一尋、困躄仏顯、了了如画。《無上依經云、衣服飲食、車乘臥具、諸狂獸物、歡喜施与、得身金色円光一丈相》			頸相出二光其光万色。遍照十方一切世界……遍斯光……成辟支仏。此光照諸辟支仏頭。此相現時。行者遍見十方一切諸辟支仏。攬鉢虚空作十八變……一一足下皆有文字。其字演說十二因緣。664b02-b07
(08)頸出二光	十八、頸出二光、其光万色、遍照十方一切世界、遍此光者、成辟支仏、此光照諸辟支仏頭、此相現時、行者遍見十方一切諸辟支仏、攬鉢虚空作十八變、一一足下皆有文字、其字演說十二因緣。《已上三種。梁広觀者、応用之》			欠叁骨滿相……遍照十方作虎魄色……遍此光者……發声聞意。是諸声聞見此光明。分為十支。一支千色。十千光明光有化仏。一一化仏有四比丘以為侍者。一一比丘皆說苦空無常無我。664b18-b23
(09)欠叁骨滿相	十九、欠叁骨滿相、光照十方、作虎魄色、遍此光者、發声聞意、是諸声聞、見此光明、分為十支、一支千色、十千光明、光有化仏、一一化仏、有四比丘、以為侍者、一一比丘、皆說苦空無常無我。《已上三種。梁広觀者、応用之》			
(20)肩頂円滿	二十、世尊肩頂、円滿殊妙。《法華文句云、恒令施增長故、得此相》	世尊肩頂円滿殊妙。是第十六。967c15		
(21)腋下充美	二十一、如來腋下、悉皆充美、放紅紫光、作諸仏事、利益眾生。《無上依經、於衆生中、為利益事、修四正勤、心無所畏、得阿肩平整而腋下満相》	世尊腋腋悉皆充美。是第十七。967c15-c16		
(22)仏双臂肘	二十二、仏双臂肘、明直満円、如象王鼻、平立摩膝、或次志灰觀、手掌千輻理、各放百千光、遍照十方、化成金水、金水之中、有一妙水、如水精色、嚴見見除熱、畜生識宿命、狂象見者為師子王、師子見金翅鳥、諸畜亦見金翅鳥王、是諸畜生各見所導、心生恐怖、合掌恭敬、以恭敬故、命終生天。《大集經云、救護怖畏、得臂肘圓、見他事業、在助故、得手摩膝相》	世尊双臂前直満円。如象王鼻平立摩膝。是為第九。967c05-c07		臂滿満円如象王鼻……手……掌千輻理。各各皆放百千光……遍照十方……化成金水。金水之中有一妙水如水精色。嚴見見者除熱……畜生……識宿命。狂象見者為師子王。師子見之為金翅鳥。諸龍見之為金翅鳥王。是諸畜生各見所導。心生恐怖合掌恭敬。以恭敬故命終生天。665b10-b18
(23)諸指円滿	二十三、諸指円滿、充盛纖長、甚可愛樂、於一一端、各生万字、其爪光潔、如華赤銅。《瑜伽云、於諸尊長、恭敬礼拜合掌起立故、得指纖長相》	世尊手足所有諸指。円滿纖長甚可愛樂。是為第十五。967c01-c02		

22)指間輪網	二十四、 一指間 、猶如鷹王威有輪網、金色交絡、文同綺画、勝鬘淨金、百千万億、其色明透、過於眼界、張時則見、翳指不見 (大經云、修四攝法、攝取衆生故、得此相)	世尊手足 一指間 。猶如鷹王威有輪網。金色交絡文同綺画。是為第四。967b28-c01		
23)其手柔軟	二十五、其手柔軟、如都羅綿、勝過一切、内外俱握 (大經云、父母師長若病苦、自手洗拭捉持安摩故、得柔軟相)	世尊手足皆悉柔軟。如觀羅綿勝過一切。是為第三。967b27-b28	如來手内外握。648b24	
24)額體广大	二十六、 世尊額體 、并身上半、威容广大、如師子王 (論伽云、於諸有情如法所作、能為上首、而作助伴、難於我慢、無諸嫌嫉故、得此相)	世尊額體并身上半 。威容广大如師子王。是第二一。967c19-c20		
27)胸有万字	二十七、胸有万字、名突相印、放大光明、或次應廣觀、光中有無量百千紫花、一一花上、有無量化仏、是諸化仏各有千光、利益衆生、乃至遍入十方仏頂、時諸仏胸出百千光、一一光說六波羅蜜、一一化仏、遣一化人端正微妙狀如弥勒、安趣行者 (見此相光者、除十二億劫生死之罪)	胸體字万字……放光明……光……中有……無量百千万億無數紫華、一一華上有無量仏。是諸化仏各有千光……遍入十方諸仏頂上。入已諸仏胸中有百千光……一一光……說六波羅蜜……一一化仏遣一化人、端嚴微妙狀如弥勒。安趣行者665a15-a26		
28)心如妙光	二十八、如來心相、如紅蓮華、妙紫金光、以為同體、如琉璃筒、懸在仏胸、不合不調、圓円如心、万體化仏、遊仏心間、又無量應數化仏、在仏心中、坐金剛台、放無量光、一一光中、亦有無量應數化仏、出広長舌、放万億光、作諸仏事 (念仏心者、除十二億劫生死之罪、生生得值無量菩薩、云云、樂宏觀者、心作此觀)	如來心者如紅蓮華……妙紫金光以為同體。妙琉璃筒懸在仏胸……万體化仏……遊仏心間。665b29-c03 無量微塵數化佛……放金色光……一一光中亦有化仏。……出広長舌相668a20-a24 念仏心者除十二億劫生死之罪……生生……得值無量菩薩。675a23-a25		
29)身皮金色	二十九、 世尊身皮 、皆真金色、光潔晃曜、如妙金台、衆宝莊嚴、衆所樂見 (大經云、施衣服眼具、得此相)	世尊身皮皆真金色 。光潔晃曜如妙金台。衆宝莊嚴衆所樂見。是第十四。967c12-c13		
30)身光任運	三十、身光任運、照三千界、若作意時、無量無邊、然為勝慈諸有情故、攝光常照、面各一尋 (大經云、以香花燈明等施人、得此相、云云、觀大光者、但疑心見、除却衆罪)	世尊常光面各一尋。是第二十二。967c20	觀門光及丈六者。但疑是心如見不見除却衆罪。675b01-b02	
31)身相直広	三十一、 世尊身相 、備広端嚴 (大論云、恭敬尊長、迎送侍邊、得身直広相)	世尊身相備広端嚴 。是第十九。967c17		
32)体相縱広	三十二、 世尊体相 、縱広量等、周匝円滿、如尼拘陀樹 (大集云、常勸衆生、修三昧、得此相、報恩降云、若有衆生四大不調、能為療治故、得身方円相)	世尊体相縱広量等 。周匝円滿如樹量陀。是第二十二。967c17-c19		
33)容儀端直	三十三、 世尊容儀 、洪滿端直 (論伽云、於染病者、早服瞻侍、終施良藥故、得身不攣曲相)	世尊容儀円滿端直 。是第十八。967c16-c17		
34)如來隱藏	三十四、如來隱藏、平如滿月、有金色光、猶如日輪、如金剛器、中外俱淨 (大經云、見衆施衣故、得除馬藏相、大集云、覆藏他過故、大論云、多修淨儀、及斷邪淫(故)、導師師云、私言、若多貪欲色者、即想如來隱藏相者、欲心即止、罪障除滅、得無量功德)	世尊隆相勢峯藏密。其猶龍馬亦如象王。是為第十。967c07-c08	如金剛器中外俱淨687a14-a15	
35)阿尼足滿	三十五、 世尊阿足 、二手掌中、項及双肩、七処充滿 (大經云、行施之時、所珍之物、能捨不捨、不觀福田及非福田、得七処滿相)	世尊阿足二手掌中項及双肩七処充滿 。是第十五。967c13-c15		
36)又端滿円	三十六、 世尊双照 、漸次端円、如鬘泥耶仙鹿王騰、騰鈎藥骨盤結之間、出諸金光 (論伽云、自於正法、如美拱委、以為他說、及正為他嘗作給使、得鬘泥耶仙鹿王騰)	世尊双照漸次端円 、如鬘泥耶仙鹿王騰。是為第八。967c04-c05		
37)足跟円滿	三十七、 世尊足跟 、広長円滿、与跌相称、勝諸有情	世尊足跟広長円滿 。与跌相称勝余有情。是為第六。967c02-c03		

(38)足跟脩高	三十八、足跟脩高、猶如龜背、柔軟妙好、与跟相称 〔瑜伽云、慈足下平滿千輪輪狀指三相之業、慈能慈得跟狀二相、是前三相所依止故〕	世尊足跟脩高充滿。柔軟妙好与跟相称。是為第七。 967c03-c04		
(39)身八万四千毛	三十九、如來之身。前後左右、及以頂上、各有八万四千毛生、柔潤紺青、右旋宛眼、或次忖度、如雨沛 〔無上依經云、修諸勝善法、無中下品、恒令增上、得身毛上靡右旋宛眼相、優婆塞戒經云、親近智者、樂聞衆論、聞已來修、樂治道路除去棘刺故〕	世尊足下千輪輪文觀嚴衆相無不円滿。是為第二。 967b26-b27		頭上有八万四千毛。皆面向離右旋而生。 649a18-a19 一一毛端有百万億塵數蓮花。一一蓮花上無量……化仏。 682b03-b04 諸佛頌雲。声声相次猶如雨沛。 682b08
(40)足下平滿相	四十、世尊足下、千輪輪文、觀嚴衆相、無不円滿 〔瑜伽云、於其父母、種種供養、於諸有情諸苦惱事、種種救護、由往來等動軀業故、得此相、云云、見千輪輪相、知千劫極重惡業〕	世尊足下有平滿相。妙善安住猶如窟底。地雖高下隨足所隨皆悉坦然無不平等。是為第一。 967b24-b26		足跟、各生一華。……因遮諸光。滿足十匝。華華相次。一一華中有五化仏。一一化仏五十菩薩以為侍者。一一菩薩、其頂上生摩尼珠光。此相現時。仏身毛孔……生八万四千微細小光明。嚴飾身光極令可愛。……此光一尋其相衆多。……乃至他方諸大菩薩。觀仏之時此光隨大。 660a10-a20
(42)足下生一華	四十二、樂広者応観、足下及眼、各生一花、因遮諸光、滿足十匝、花花相次、一一花上、有五化仏、一一化仏、五十五菩薩、以為侍者、一一菩薩頂、生摩尼珠光、此相現時、仏體毛孔、生八万四千微細小光明、嚴飾身光、極令可愛、此光一尋、其相衆多、乃至他方諸大菩薩、觀此之時、此光隨大			

・大正新修大藏經の出典は（ ）に示した。・四十二相の割注は◇に示した。・『大般若經』【觀仏經】から四十二相へ引用された文言はゴチック体で表した。

ない。

そこで次章では、四十二相全体における『觀仏經』の引用を調べ、その結果を加味した新たな分類を試みる。また、『觀仏經』引用の目的についても併せて検討する。

二、『觀仏經』引用の目的と新たな分類

(1) 『觀仏經』引用の目的

四十二相全体における『觀仏經』の引用を改めて調べたところ、『大般若經』を引用する相の多くにも、『觀仏經』の引用が認められた。また引用された『觀仏經』は、四十二相の本文・割注でそれぞれ異なる目的を持つことも明らかになった(表二)。

そこで、まず本項で『觀仏經』引用の本文・割注における異なる目的を明らかにし、その上で次項において『觀仏經』の引用を加味した四十二相の新たな分類を試みる。

はじめに、本文における『觀仏經』引用の目的は、詳細な観想を説くことである。多くの場合、『觀仏經』の引用は『大般若經』からの簡潔な引用に続いて行われるが、その際、『觀仏經』からの引用文に先行して「或樂広観者」(或は広く観ぜんと樂ぶ者は)等の語句が置かれることが多い。その意味は「さらに詳細に観想することを望む者は、次のように観ぜよ」⁽²⁾というもので、後ろに続く『觀仏經』からの引用は、詳細に観想したい者が対象であることを示す。

次に、割注における『觀仏經』引用の目的は、その相を觀じた利益

表二 『観仏経』引用の本文・割注における異なる目的

引用場所 『観仏経』 を引用する相 と目的	本文 詳細な観想を説く目的		割注 利益を説く目的
	引用の有無	引用に先行する語句	引用の有無
(1) 頂上肉髻	有	或樂広観者、次応観	有
(2) 頂上髮毛	有	或樂広観者、応観	—
(3) 髮際五千光	有	樂広観者、可用此観（文末）	有
(4) 耳厚広長	有	或応広観	有
(6) 面輪円満	—		有
(7) 眉間白毫	有	或次応広観	有
(8) 如来眼睫	有	或次応広観	—
(9) 仏眼青白	有	或次応広観	有
(10) 鼻脩高直	有	—	有
(11) 脣色青好	有	或次応広観	—
(12) 四十齒齊	有	—	—
(14) 舌相広長	有	或次可広観	有
(15) 舌下宝珠	有	—	—
(16) 咽頭瑠璃	有	—	—
(17) 頸出円光	有	(19)の文末で3相まとめて 已上三種、樂広観者応用之	—
(18) 頸出二光			—
(19) 欠瓮骨満相			—
(22) 仏双臂肘	有	或次応広観	—
(25) 其手柔軟	有	—	—
(27) 胸有万字	有	或次応広観	有
(28) 心相妙光	有	樂広観者、応作此観（文末）	有
(30) 身皮金色	—		有
(34) 如来陰藏	有	—	—
(39) 身八万四千毛	有	或次応広観	—
(40) 足下千輻輪	—		有
(42) 足下生一華	有	樂広者応観（文頭）	—

を説くことである。²³⁾このことは、(4)耳厚広長の割注で、「下去諸利益、皆亦観仏三昧経而注」²⁴⁾（下去のもろもろの利益も、皆また観仏三昧経に依りて注す）と記されていることでも確認できる。

(2) 『観仏経』の引用を加味した新たな分類

福原氏の『大般若経』引用を主軸とした分類に、今回の検討で明らかになった『観仏経』の引用を加味したところ、次の五つに分類された。

① 『大般若経』三十二相のみを引用する十五の相、② 『大般若経』三十二相と『観仏経』を引用する十二の相、③ 『大般若経』三十二相・八十随形好と『観仏経』を引用する一つの相、④ 『大般若経』八十随形好と『観仏経』を引

用する四つの相、⑤『觀仏經』のみを引用する十の相である。このうち、『觀仏經』の引用が加味されたのは、②③④である。以下、具体例をあげながら考察する。

①『大般若經』三十二相のみを引用する十五の相

『大般若經』三十二相のみを引用する相で、十五の相が該当する（十五の相の内訳は表三参照、以下同じ）。ここでは、(13)四牙鮮白を例にあげ、引用関係を確認する。なお、対応する箇所はゴチック体で示した。また、四十二相本文に続く〈 〉内は割注である。

『往生要集』別相觀四十二相 (13)四牙鮮白

十三 四牙鮮白、光潔鋒利、如月初出（大集經云、身口意淨故、得二牙白相（後略））

『大般若經』三十二相

世尊四牙鮮白鋒利。是第二十四。²⁵

引用元の『大般若經』三十二相の記述が簡潔であるため、四十二相の文もまた簡潔である。これは①の十五の相に共通する特徴である。

②『大般若經』三十二相と『觀仏經』を引用する十二の相

『大般若經』三十二相のみならず『觀仏經』を引用する相は、十二の相で確認された。ここでは(1)頂上肉髻を例にあげる。

『往生要集』別相觀四十二相 (1)頂上肉髻

一、頂上肉髻、無能見者、高顯周圍、猶如天蓋、或樂広觀者、次
 心觀、彼頂上有大光明、具足千色、一一色作八万四千支、一支
 中有八万四千化仏、化仏頂上亦放此光、此光相次、乃至上方無量
 世界、於上方界有化菩薩、如雲而下、圍遶諸仏（大集經云、共敬

父母師僧和上、得肉髻相、云云、若於此相生隨喜者、除却千億劫
 極重惡業、不隨三塗）

『大般若經』三十二相

世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圍。猶如天蓋。是第三十二。²⁶

『觀仏經』

其光千色。色作八万四千支。一支中。八万四千諸妙化仏。其化
 佛身身量無辺。化仏頂上亦放此光。光光相次乃至上方無量世界。
 於上方界有化菩薩。如雲微塵從空而下圍遶諸仏。²⁷

相生隨喜者。除却千億劫極重惡業。後世生処。不落三塗。²⁸

右の比較から、(1)頂上肉髻は『大般若經』三十二相と『觀仏經』を引用したこと、また『觀仏經』の引用は、本文では「或樂広觀者」という語句に先行され、割注では利益を説くことが確認できる。

③『大般若經』三十二相・八十隨形好と『觀仏經』を引用する一相

(6)面輪円満については『大般若經』三十二相のみならず、同八十隨形好と『觀仏經』からの引用が認められた。以下、対応する箇所をゴチック体で示したが、その引用関係はモザイクのように複雑であるため、確認には注意を要する。また、「満月」「円満」は傍線を付して強調したが、その内容については後述する。

『往生要集』別相觀四十二相 (6)面輪円満

六、面輪円満、光沢熙怡、端正皎潔、猶如秋月、双眉皎淨、以天
 帝弓、其色無比、紺瑠璃光（見來求者、生歡喜故、面輪円満、觀
 此相者、除却億劫生死之罪、後身生処面見諸仏）

『大般若經』三十二相

表三 四十二相の引用元による分類と阿弥陀の頭・体・足各部の対応関係

引用元による分類 阿弥陀の各部		①『大般若経』三十二相のみを引用する 15の相	②『大般若経』三十二相と『観仏経』を引用する 12の相	③『大般若経』三十二相・八十随形好と『観仏経』を引用する 1つの相	④『大般若経』八十随形好と『観仏経』を引用する 4つの相	⑤『観仏経』のみを引用する 10の相
頭部 19相	頭		(1)頂上肉髻 (2)頂上髮毛			(3)髮際五千光
	耳				(4)耳厚広長	
	額				(5)額広平正	
	顔			(6)面輪円満		
	眉		(7)眉間白毫			
	目		(8)如来眼睫 (9)仏眼青白			
	鼻				(10)鼻脩高直	
	唇				(11)唇色赤好	
	歯	(13)四牙鮮白	(12)四十歯齊			
	舌		(14)舌相広長			(15)舌下宝珠
頸部					(16)咽喉瑠璃 (17)頸出円光 (18)頸出二光 (19)欠瓮骨満相	
体部 16相	(20)肩項円満 (21)腋下充実 (23)諸指円満 (24)指間輓網 (26)額臆広大 (29)身皮金色 (31)身相脩広 (32)体相縦広 (33)容儀端直	(22)仏双臂肘 (25)其手柔軟 (30)身光任運 (34)如来陰藏				(27)胸有万字 (28)心相妙光 (39)身八万四千毛
足部 7相	(35)両足充滿 (36)双臚纖円 (37)足跟円満 (38)足趺修高 (41)足下平満相	(40)足下千輻輪				(42)足下生一華

注：引用元の分類に示す①～⑤は、本稿の本文第三章における分類を示す。

世尊面輪其猶満月。眉相皎浄天帝弓。是第三十。⁽²⁹⁾

『大般若経』八十随形好

世尊面輪脩広得所皎潔光浄如秋満月。是五十七。⁽³⁰⁾

世尊面貌光沢熙怡。是五十九。⁽³¹⁾

『観仏経』

仏面。与我住世等無有異。作此觀者。除却一億劫生死之罪。後身生处见面見諸仏。⁽³²⁾

右の引用関係を整理すると、『大般若経』三十二相と八十随形好で満月と表現された面輪は、四十二相の(6)面輪円満では円満と表される。なぜ、満月は円満に変わったのだろうか。

このことについて考えるにあたり、以下に示す別相觀四十二相の(5)額広平正、(6)面輪円満と、『大般若経』八十随形好における語句の異同を比較する。

『往生要集』別相觀四十二相 (5)額広平正、(6)面輪円満

五、額広平正、形相殊妙

六、面輪円満、光沢熙怡

『大般若経』八十随形好

世尊額広円満平正形相殊妙。是四十五。⁽³³⁾

これらの文から、次のようなことが推察される。すなわち、源信は、『大般若経』八十随形好の「額広円満平正」という表現から円満を抜き取り、四十二相で(5)「額広平正」として引用、かたや、抜き取られた円満は四十二相の(6)面輪円満で、本来の引用なら満月とされる場所に嵌め込まれたのである。つまり、『大般若経』で「額広円満平正」として額の形状のみを円満と表現したのに対し、四十二相では「面輪円満」として顔面全体に表現の範囲を広げたのである。このようにして顔面全体を円満と表現したのは、次章で考察するように、阿弥陀仏の全身を「円満」表現で表す目的があつたからではないだろうか。

④『大般若経』八十随形好と『観仏経』を引用する四つの相

以下に示す四つの相は、『大般若経』八十随形好と『観仏経』からの引用が認められた。ここでは(4)耳厚広長を取り上げる。

『往生要集』別相觀四十二相 (4)耳厚広長

四、耳厚広長、輪埵成就、或応広観、旋生七毛、流出五光、其光

千色、色千化仏、仏放千光、遍照十方無量世界（此随好之業因、

可勘、観仏三昧経云、観此好者、滅八十劫生死之罪、後世常与陀

羅尼人為眷属、云々、下去諸利益、皆亦依観仏三昧経而注）

『大般若経』八十随形好

世尊耳厚広大脩長 輪埵成就。是四十二。⁽³⁴⁾

『観仏経』

耳出五光 其光千色。色千化仏。仏放千光。如是光明遍照十方無

量世界。⁽³⁵⁾

除滅八十劫生死之罪。⁽³⁶⁾

陀羅尼人以為眷属。⁽³⁷⁾

この例においても、『大般若経』の引用に続き、「或応広観」という語句に先行され、『観仏経』が引用される。また、前述のとおり、この相の割注後半で「下去諸利益、皆亦依観仏三昧経而注」として、「諸利益」を『観仏経』から引用することが明らかにされている。

⑤『観仏経』のみを引用する十の相

『観仏経』のみを引用する十の相でも、次のことが確認できた。

まず、(17)頸出円光、(18)頸出二光、(19)欠瓮骨満相の連続する三相は、頸から出る光に関する相である。このうち、三つ目の(19)欠瓮骨満相の割注には「已上三種、樂広観者応用之」（已上三種は、広く観ぜんと樂ふ者、応にこれを用ふべし）として、この三相は「詳細に観想しようとする者のみが行えばよい」⁽³⁸⁾ことを明示している（表二参照）。

また、(3)髮際五千光と(28)心相妙光も光に関する相であるが、それぞれの文末にも、詳細な観想の必要な者を対象とする旨が明示される。

さらに、(42)足下生一華は、文頭に「樂広者心観」（広きを樂ふ者は心に観ずべし）と記され、詳細な観想を必要とする者を対象としたことをはじめに断っている。このように、『観仏経』のみを引用する十

の相の多くは、詳細な観想をする者を対象としたものである。

(3) 詳細な観想を説く『観仏経』

前項での新たな分類を通して、引用された『観仏経』の内容は、その相が『大般若経』と『観仏経』二経からの引用であれ、『観仏経』のみの引用であれ、多くの場合、詳細な観想を説いたものであることが明らかになった。

このことは、源信が四十二相の所依經典について述べた文「然今三十二略相、多依大般若、広相隨好、及諸利益、依觀仏経」でも確認することができる。この文は、本稿冒頭部分ですでに取り上げたが、ここでは、『大般若経』『観仏経』二経の引用について述べた部分について再度取り上げる。

まず、「三十二略相、多依大般若」という部分の解釈である。これは、「三十二相の略相（概略）の多くを『大般若経』に依ったという意味であり、『大般若経』三十二相の簡略な原文を引用したことを示す。

続く「広相隨好、及諸利益、依觀仏経」は、「広相隨好」と「諸利益」を『観仏経』に依ったという意味である。このうち「広相」³⁹⁾と書かれた部分が、詳細で広い観想内容を『観仏経』に依ったことを示す。

本章では、『観仏経』の引用を中心に新たな分類を行ったが、ここで明らかになったのは、『観仏経』を引用した内容が、『大般若経』引用の内容を越えた、詳細で広い観想を説いたことである。

では、引用された二経は、それぞれ阿弥陀仏のどの部分を説くのであろうか。次章で検討する。

三、四十二相の特徴——頭部表現と「円満」表現

(1) 頭部に多い『観仏経』の引用

『大般若経』『観仏経』の二経が、阿弥陀仏のどの部分を説くのかを探るため、再び表三をみてみよう。この表は、前章で行った①～⑤の分類と、阿弥陀仏の頭・体・足各部の対応関係を可視化したものである。この表からは、『大般若経』のみを引用する相①が阿弥陀仏の体部・足部に関する相が殆どを占めるのに対し、『観仏経』を引用する相②～⑤は頭部に関する相が多いことがわかる。頭部に『観仏経』引用が多いということは、源信が、『大般若経』の引用だけで頭部の観想を説くのは不充分と考えたためであろう。⁴⁰⁾

源信が四十二相を説いた目的は、四十二相の記述の冒頭部で、阿弥陀仏を「正觀相好」（正しく相好を觀ず）と記したことから明らかである。すなわち、阿弥陀仏の相好を正しく觀ずるためには、『大般若経』からの引用だけでなく、『観仏経』の引用が必要となったのである。『観仏経』引用に関しては、『往生要集』大文第十問答料簡第十助道人法において「明諸仏相好、并觀相滅罪、不如觀仏三昧経（十卷或八卷、覺賢訳）（諸仏の相好、并に觀相の滅罪を明かすことは、觀仏三昧経（十卷或は八卷、覺賢の訳）にはしからず⁴¹⁾）として、仏の相好や観想の滅罪を説くのに最適なのは『観仏経』であると述べられている。『観仏経』の引用が四十二相で多く行われたのは、源信のこの考

えによるものであろう。

また、四十二相に続く部分では、観想の方法について「順観次第、大途如是」（順観の次第はおよそかくの如し）として、順観から始めること、「逆順反復、経十六反」（逆順反復すること、十六反を経よ）として、順観・逆観を十六遍繰り返すことが説かれる。順観から始まり、十六回に及ぶ観想の起点としても頭部の詳細な説明は必要であった。

(2) 「円満」表現

前章で(6)面輪円満を取り上げた際、面輪だけでなく全身に「円満」表現が使われていることに言及した。ここで、その内容を具体的に示すと、(6)面輪円満で阿弥陀仏の面輪が円満であることを説いたのに加えて、(20)肩項円満では肩、(23)諸指円満では指、(32)体相縦広では文中で「周匝円満」として体の周囲、(37)足跟円満では足や跟、(40)足下千輻輪では足裏の千輻輪と、それぞれの部分についての円満が説かれている。しかも、円満を説く順番は、順観により徐々に下がる視点の動きに沿ったものである。

また、この「円満」に類似する表現として、(22)仏双臂肘で「明直臍円」として肘の丸味のあるさま、(33)容儀端直で「洪満」として体の丸いさまも表現されている。

このように、四十二相では、全身にわたって「円満」やこれに準ずる丸味が順観により表現されており、実際の観想を通じて阿弥陀仏の相好が「円満」なものとして定着したと考えられる。

(3) 色彩と光の表現

四十二相は、円満だけでなく色彩や光に関する表現も豊富に持つ。それらは引用元の表現をそのまま使ったものであるが、四十二相で順観により列挙されたことにより、阿弥陀仏を観想する際に円満表現と相俟って役立ったであろう。

このうち色彩の表現は、顔面において顕著である。すなわち、(2)頂上髪毛では髪の毛の紺青色を「紺青稠密」、(7)眉間白毫では白毫の白さを「鮮白逾珂雪」、(8)如来眼睫では睫の紺青を「紺青齋整」、(9)仏眼青白では白目と瞳の青を「白者過白宝、青者勝青蓮花」、(11)唇色赤好では唇の赤を「如頬婆菓」、(12)四十齒齊では歯の白さを「白逾珂雪」、(13)四牙鮮白で糸切り歯の白さを「鮮白光潔」というように、引用元の譬喩表現を活かし彩り豊かに説く。

また、体部については、(24)指間輓網で縵網相を「金色」、(29)身皮金色で体全体を「皆真金色」と「金色」で表現する。

これに加え、光に関する描写も、二十六の相にわたって説かれる。特に顔面に関しては、その殆どの相に光の表現が認められ、喉に関しても(17) (19)の三相、胸に関しては(27) (28)の二相に光の表現が認められる。それだけでなく、全身にわたり光の表現が認められる。⁴²⁾

ここまでで明らかになったように、四十二相が説く阿弥陀仏は、頭部を中心に詳細な観想が説かれ、また全身にわたって「円満」さが表現されている。それだけでなく、顔面の色彩・体の金色などの色彩表現や、全身からの光の表現など、視覚化しやすい記述により描かれている。このように体系的に視覚化された阿弥陀仏の描写は、観想念仏

の具体的な方法を提示する指南書として、大きな役割を果たしたと考えられる。

さらに『往生要集』には、「仏像」「形像」等の表現が散見され⁴³、観想や臨終行儀の場などに安置された実際の仏像にも、四十二相の内容が反映されたことが考えられる。

四、仏像の和様化——仏師康尚の出現と作風の飛躍

『往生要集』が世に出た当時の造像界は、本稿冒頭部分で述べたように、新たな作風の規範を模索する時期にあった。四十二相に説かれた阿弥陀仏の理想的な相好は、停滞する状況に風穴を開け、一つの指針を与えた可能性が考えられる。すなわち、この時期に活躍した仏師康尚は、四十二相の内容を採り入れた造像を行い、これを契機として仏像の和様化が飛躍的に進んだと考えられる。

『往生要集』以前の比叡山は、良源による復興運動に伴い世俗化が進行し、念仏は「甘美な称名念仏としての「山の念仏」に変質⁴⁴」した。これに危機感を覚えた源信は、「観想念仏こそ往生業としての念仏のあるべき姿⁴⁵」という確信のもとに、「天台教学による念仏往生理論の壮大な体系化である『往生要集』⁴⁶」を執筆し、極楽往生のための観想念仏の方法を具体的・実践的に示した。その結果、『往生要集』は「浄土教家・念仏者の間に空前の反響⁴⁷」を以て受け入れられ、翌寛和二年（九八六）には慶滋保胤により二十五三昧会が結成され、観想念仏が実践された。

仏師康尚の活動はこのような状況下で開始された。康尚による造像

の文献上の初出は、正暦二年（九九一）河原院丈六釈迦如来像であるが、この像は源信と近い関係にある天台僧仁康による五時講のための本尊として発願された。この像の特筆すべき事項は、当時、霊験仏と見なされた白鳳仏である大安寺釈迦如来像の模刻として制作されたことである⁴⁹。

次いで康尚は、正暦年中（九九一〜九九五）に霊山院の釈迦如来像の制作を行った。霊山院は、源信が横川に建立したもので、源信主催の釈迦講が開催された際には、仁康をはじめ、藤原道長側室の倫子など藤原摂関家も参加したという⁵¹。このように康尚の造像活動は源信周辺から始まっており、『往生要集』の内容が康尚に影響を与えたことは十分に考えられる。とりわけ仏師にとって参考となったのは、造像に直接反映しやすい四十二相の記述だったであろう。

長徳四年（九九八）になると、康尚は仏師として初の土佐講師に補任された⁵³。康尚の講師職補任に関する評価は議論の余地を残すものの⁵⁴、それまで工人として評価されてきた仏師が僧侶の身分を獲得したことは、康尚が摂関体制に組み込まれ、「新たな社会的身分の位置付け⁵⁵」を獲得したという点で評価される。

その後康尚は、一条天皇の藏人頭となった藤原行成や、一条天皇関係の造像を行い、藤原摂関家の造像にも携わるようになる。この藤原摂関家の造像の代表例は、道長発願による寛弘三年（一〇〇六）開眼の法性寺五大堂の五大明王像⁵⁶である。五大明王像のうち、中尊の不動明王像一体は東福寺同聚院に現存し、康尚の唯一の現存作とされている。本来、不動明王像は忿怒像であるため、激しい感情表現を伴うの

が一般的であるが、本像については「激しい感情を薄めるべく緻密に計算された和様⁵⁹⁾」とか、「穏やかな憤怒の表情⁶⁰⁾」と評価され、それまでの不動明王像とは作風において一線を画する。

さらに、寛仁四年（一〇二〇）、道長発願による法成寺無量寿院丈六九体阿弥陀如来像は、制作にあたって康尚の実弟子定朝の関与が記録され、現存しないものの、史料上康尚の最晩年作である。

以上が康尚の主な造像活動であるが、彼の発注主は源信周辺、藏人頭藤原行成、一条天皇、藤原摂関家等、摂関政治を通じ互いに密接な関係を持ち、権力の中枢に近い場所にいた人々である。康尚は、彼らの大量の注文に応えるために私的工房を構えたが、自身も彼らと共通する宗教観や美的感覚を持ち合わせ、造像にあたったと考えられる。

また、康尚の最初の事蹟が源信周辺の造像であったことを考えると、『往生要集』の反響の下、四十二相の再現を目指して造像に励んだことは容易に想像できる。権力の中枢を背景として制作された康尚の仏像の作風は、造仏界に規範力を持って広がり、仏像の和様化を飛躍的に進展させたのであろう。⁶²⁾

康尚活躍期の京都周辺の現存像には、永祚元年（九八九）遍照寺十一面観音立像・不動明王像、正暦二年（九九二）長徳元年（九九五）禅定寺十一面観音像、正暦三年（九九二）真正極楽寺阿弥陀如来像、長徳三年（九九七）六波羅蜜寺薬師如来坐像、長保五年（一〇〇三）平等寺薬師如来像、寛弘九年（一〇一二）広隆寺千手観音立像などがある。いずれも、今日作者を確定させる史料はないものの、それらの作風の円満さは同聚院不動明王像に通じるものがあり、仏像の和

様化の特徴を備えるものである。その後、康尚による仏像の和様化の流れは、定朝に引き継がれ、天喜元年（一〇五三）制作の平等院鳳凰堂阿弥陀如来像において「定朝様」として完成し、後世の造像の基準となった。

おわりに

本稿の目的は、四十二相への『大般若経』と『観仏経』の引用内容を明らかにすることと、その内容が仏像の和様化に及ぼした影響について考察することであった。

考察の結果、『大般若経』の簡潔な引用に加え、『観仏経』の詳細な引用が頭部を中心に、多くの相で行われていることが明らかになった。さらに、四十二相では、阿弥陀仏の理想的な姿を頭部から体部まで順観によって説きながら、各部の円満さを説いていることも明らかになった。この「円満」表現は、阿弥陀仏の観想を容易にするのみならず、造像においても再現性の高いものである。仏師康尚は、四十二相を反映した造像を大量に行ったが、その作風は、発注主の権力を背景に規範力を持ったと考えられ、仏像の和様化が飛躍的に進むこととなった。

もちろん、仏像の和様化の要因は、四十二相の影響だけではないだろう。皿井舞氏が指摘したように、⁶³⁾由緒ある像の模刻による古典学習も、その一因と考えられる。『往生要集』が世に出たこの時期は、いわゆる国風文化の盛んな時期でもあり、仏像の和様化も様々な要因が重なることによって推し進められたのであろう。今回考察した、四十

二相と仏像の和様化との関係性についても、当時の文化的状況と照らしあわせ、さらなる検討が必要である。

〔注〕

- (1) 本稿における『往生要集』原文は日本思想体系『源信』（石田瑞麿校注、岩波書店、一九七〇年）を引用する。なお、ここに取り上げた文の後半部分についての解釈は第二章第三項で行う。
- (2) 本稿における『往生要集』の訓み下し文は、前掲註一の日本思想大系『源信』を引用する。
- (3) 伊東史郎「平安時代の彫刻史——唐風の消長——」『平安時代彫刻史の研究』名古屋大学出版会、二〇〇〇年、五頁
- (4) 山本勉『日本仏像史講義』平凡社新書、二〇一五年、九五頁
- (5) 皿井舞「国風文化期の美術——その成立と特徴」『シリーズ古代史をひらく 国風文化』岩波書店、二〇二一年、一六九頁
- (6) 伊東史郎「康尚時代の仏像をめぐる二三の問題」『研究発表と座談会 康尚の時代』仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第三十五冊、二〇〇八年、一頁
- (7) 皿井舞「模刻の意味と機能——大安寺釈迦如来像を中心に」『京都大学文学部美学美術史学研究紀要』、二〇〇一年、一一八頁
- (8) この飛躍の一因として皿井舞氏は、大安寺釈迦如来像における「古典彫像の模刻」によって「規範の対象の変化」がおこったことを指摘する（後掲註四九参照）。
- (9) 速水侑『日本仏教史 古代』吉川弘文館、一九八六年、二二六頁
- (10) 速水侑『源信』吉川弘文館、一九八八年、一一六頁
- (11) 水野敬三郎「平安時代後期の彫刻」『日本美術全集6 平等院と定朝』講談社、一九九四年、一五二頁
- (12) 水野氏前掲論文、一五二頁
- (13) 根立研介「彫刻史における和様の展開と継承をめぐって」『哲学研究』第五八三号、京都哲学会、二〇〇七年、四頁
- (14) 清水眞澄『仏像の顔——形と表情をよむ』岩波新書、二〇一三年、一三五頁
- (15) 本稿において参考とした福原隆善氏の先行研究は以下である。「『往生要集』別相観の四十二相について」『親鸞教学論叢 村上速水先生喜寿記念論叢』永田文昌堂、一九九七年。「源信における相好観」『宮林昭彦教授古稀記念論文集』山喜房佛書林、二〇〇四年。「源信における仏の相好観」『往生要集』別相観の四十二相。上記二つは『源信和尚千年』山喜房書林、二〇一八年。
- (16) 福原氏前掲論文「源信における仏の相好観」
- (17) 福原氏前掲論文「『往生要集』別相観の四十二相」
- (18) 『大般若経』三十二相から引用されなかった四相は、第十一相「毛孔各一毛生」、第十三相「身皮細薄潤滑」、第二十五相「常得味上味」、第二十七相「梵音詞韻弘雅」である。
- (19) 本稿での四十二相の表記は、原則として福原氏前掲論文「源信における仏の相好観」、八十二頁～八十四頁の表記に倣った。
- (20) 福原氏前掲論文「源信における仏の相好観」、八十七頁
- (21) 『観仏経』のみを引用する相も、本文における目的は同様である。
- (22) 梯信暁「新訳往生要集」下、十頁。梯氏の現代語訳では、「広観」の「広」という文字を「詳細」という意味に解釈する。この字の解釈は、後述する「広相」の「広」の解釈とも関連すると考えられる（後掲註三九参照）。
- (23) この他に割注において、經典名を明示し、その相を得た理由を説く目的で引用が行われる場合がある。この目的のために使われる主な經典には『大集経』のほか、『大経（涅槃経）』、『瑜伽論』『無上依経』などがある。
- (24) 『観仏経』からの引用は、この第四相以降と読み取ることができ、実際には第一相の利益も『観仏経』から引用されている。
- (25) 大正蔵卷六、九六七c二二
- (26) 大正蔵卷六、九六八a〇六～a〇七
- (27) 大正蔵卷十五、六六三a〇二～a〇六

- (28) 大正蔵卷十五、六九七a〇五〜a〇六
 (29) 大正蔵卷六、九六八a〇三〜a〇四
 (30) 大正蔵卷六、九六八c〇八〜c〇九
 (31) 大正蔵卷六、九六八c一〇
 (32) 大正蔵卷十五、六六三c〇二〜c〇三
 (33) 大正蔵卷六、九六八b二六
 (34) 大正蔵卷六、九六八b二三
 (35) 大正蔵卷十五、六六四a一九〜a二一
 (36) 大正蔵卷十五、六五六b二四〜b二五
 (37) 大正蔵卷十五、六五六b二九〜c〇一
 (38) 梯信暁前掲書、十四頁
 (39) 「広相」の現代語訳は「詳細」とされるため(梯氏前掲書二十頁、及び前掲書日本思想大系『源信』一三〇頁、頭注)、これに従う。しかし、第三章で考察する頭部表現における『観仏経』引用の状況からみると、「広相」の意味は、たんに「詳細」という意味ではなく、『大般若経』の「略相」を越えた、より「広い」範囲の「相」の説明と解釈できるのである。この「広相」の解釈は、前述の「或次広心観」の解釈(前掲註二二参照)にも関連するため、今後の課題としたい。
 (40) これと対照的に、『往生要集』の翌年に源信が撰述した『要法文』の三十二相は、『大般若経』三十二相と一致する(福原氏前掲論文「『往生要集』別相観の四十二相」)。
 (41) 前掲書日本思想大系『源信』、三一七頁。なお、同頁の頭注によれば、覚賢の梵名は仏駄跋陀羅。
 (42) 光に関する記述を含む相は(1)(2)(3)(4)(6)(7)(8)(9)(10)(11)(12)(13)(14)(17)(18)(19)(以上頭部)、(21)(22)(23)(27)(28)(29)(30)(34)(以上体部)(36)(足部)の二十六相。
 (43) 大文第五助念方法第一方処供具、第六別時念仏第一尋常別行、第二臨終行儀、大文第七念仏利益第五弥陀別益、第六引例勸信では「仏像」の記述があり、その他にも「形像」(大文第五序念方法第四止悪修善)、「尊像」(大文第七念仏利益第一滅罪生善)、「如来形像」(大文第七念仏利益第六引例勸信)等、仏像を示す表現が見られる(石田一良

- 「恵心教の宗教体験と恵心教美術の精神」『日本名僧論集第四巻 源信』吉川弘文館、一九八三年、四一四頁〜四一六頁)。
 (44) 速水氏前掲著書『源信』、八十六頁
 (45) 速水氏前掲著書『源信』、八十七頁
 (46) 速水氏前掲著書『日本仏教史 古代』、二二六頁
 (47) 速水氏前掲著書『源信』、一一六頁
 (48) 『日本紀略』『匡衡願文』『二代要記』『本朝高僧伝』
 (49) 白鳳時代に制作された大安寺釈迦如来像は、平安時代には大江親通により著せられたとされる『七大寺巡礼私記』「薬師寺条」や『七大寺巡礼私記』「薬師寺条」において最も優れた像であるとされた。康尚が大安寺像を模刻して河原院釈迦如来像を制作したことについて、中野聰氏は大安寺像の持つ「靈驗性」が尊重されたためであるとすると『靈驗仏としての大安寺釈迦如来像』『仏教芸術』二四九号、二〇〇〇年)。また、皿井舞氏は、大安寺像に「真身性」「靈驗性」のみならず「公家の正統的由緒を体現する像としての性格」が付与されたことを指摘する。三国伝来の由緒を持ち請来された清涼寺釈迦如来像が「道長との接点がない」とことと対照的に、河原院像が天台・撰関家との深い関係性を背景として、大陸の造形様式の影響を受けることなく、大安寺像の模刻により制作されたことが「日本独自の造形様式を生み出す基盤」となったという(皿井氏前掲論文「模刻の意味と機能 ―大安寺釈迦如来像を中心に」)。
 (50) 『阿婆縛抄』『三塔諸寺縁起』『山門堂舎記』
 (51) 『靈山院過去帳』『大日本史料』二一一、寛仁元年六月十日「来迎寺文書」
 (52) 講師とは、「法会において(中略)経論を高説する役僧」であり「八五九年(貞観元)からこれを歴任したものを僧綱に任ずるのが定例」となった。平安時代には「各国各分寺に置かれ(中略)仏法興隆に努める役職」となったという(『岩波仏教辞典』)。
 (53) 『権記』長徳四年(九九八)十二月二十四日条
 (54) 宇野茂樹氏は、康尚の土佐講師宣言を河原院または靈山院の造仏の賞

であるとする（宇野茂樹「平安後半期と正統仏師の誕生」『日本の仏像と仏師たち』一九八二年、一〇一頁）。これに対し、根立研介氏は、土佐講師補任の時期が康尚の活動初期であることや、『権記』の記述が「さわめて簡単」であること、他分野の複数の工人の国司補任が九世紀末頃から認められることなどから、康尚の講師補任の理由について慎重な姿勢をとる（根立研介「中世仏師の始まり―僧綱仏師の出現」『日本中世の仏師と社会』塙書房、二〇〇六年、五十三頁）。また、皿井舞氏も根立氏と同様の見解をとる（皿井舞「平安時代の天皇と造像」『天皇の美術史』、吉川弘文館、二〇一八年、一三五頁）。

- (55) 根立氏前掲論文「中世仏師の始まり―僧綱仏師の出現」、六十七頁
藤原行成は、天禄三年（九七二）に右大将藤原義孝の長男として生まれた。祖父は摂政藤原伊尹である。花山天皇の侍従を務めるが、寛和の変で花山天皇が出家・讓位したことで外戚としての地位を失う。しかし、一条天皇の時代には藏人頭となり、「寛弘の四納言」の一人として道長政権を支えた。『権記』の筆者。藤原行成関係の康尚の事蹟は、長保元年（九九九）桃園寺（世尊寺）大日如来像、普賢菩薩像、十一面観音像、石山寺本尊を模刻した銀如意輪観音像等がある（『権記』）。

- (57) 一条天皇関係の康尚の事蹟は長保二年（一〇〇〇）靈巖寺妙見像の彩色、仁寿殿の正観音像、梵天・帝釈天像の改造等である（『権記』）。

- (58) 『御堂関白記』寛弘三年（一〇〇六）十月二十五日条

- (59) 伊東史郎「十世紀後半彫刻史と康尚」『日本美術全集 6 平等院と定朝』、講談社、一九九四年、一七二頁

- (60) 『日本美術史』美術出版社、二〇〇一年、一〇三頁

- (61) 『中外抄』久安四年（一一四八）五月二十三日条の中で、寛仁四年（一〇二〇）二月二十四日の記事として記される。

- (62) 四十二相が説いたものは阿弥陀仏の相好であるが、他の如来像や、尊格の異なる像の造像にも影響したと考える。この点に関しては、さらに詳細な検討を行いたい。

- (63) 皿井氏前掲論文「模刻の意味と機能―大安寺釈迦如来像を中心に」

（前掲註八及び四九参照）

（まつで ようこ 文学研究科仏教学専攻博士後期課程満期退学）
（指導教員・大西 磨希子 教授）
二〇二三年九月二十九日受理